

# 「日本の記憶」と「ブラジルの記憶」 —日系ブラジル人のアイデンティティ—

イシカワ・エウニセ・アケミ

## 目次

- 1 はじめに
- 2 ブラジルにおける日本移民 (1908 年～)
- 3 ブラジルで形成された「日本人」としてのアイデンティティ
- 4 ブラジルにおける日系人社会
- 5 「日本人」、「日系人」、「ブラジル人」、「ガイジン」の違い
- 6 来日する日系ブラジル人の現状
- 7 結語——日系ブラジル人のアイデンティティのモデル

## 1 はじめに

現在、日本におけるブラジル人は 30 万人を超え、その大多数はブラジルの日本移民の子孫である。彼・彼女らの「移民の記憶」はどちらかと言えば、まだブラジルにおける日系人社会で築かれた「日本の記憶」である。それは、ブラジルで「立派な日本人」として自覚を持つことが重視されてきたからである。しかし、日系ブラジル人の来日が 20 年を過ぎようとしている今日、日本生まれのブラジル人が増えてきており、今度は親たちが子どもに「ブラジルの記憶」を伝えていこうという傾向にかわってきている。本稿では、ブラジルにおける「日本の記憶」と日本における「ブラジルの記憶」の意味、またその違いについて考察し、それらが日系ブラジ

ル人のアイデンティティの形成過程にどのように影響しているかに注目する。まずは、ブラジルへの日本移民の歴史的背景とブラジルにおける日系人社会の形成を紹介し、その中で「日本人」としてのアイデンティティの意味を考察する。次に、来日する日系ブラジル人が、日本において、今度は「日本人」から「ブラジル人」と意識が変わる過程を考察する。

## 2 ブラジルにおける日本移民 (1908 年～)

ブラジルにおける日系人社会は、どのように形成されてきたのであろうか。そして、その形成過程で、日本人移民およびその子孫のアイデンティティは、どのような変遷を遂げてきたのであろうか。まずは、歴史的背景を簡単に紹介する。

ブラジルへの移民は 1908 年に始まり 1970 年代初めまで続いた。日本政府の移民政策にもとづいて、第一期 (1908 年から 1923 年)、第二期 (1924 年から 1941 年)、そして戦後の移民の第三期 (1952 年～) に分けられる (鈴木、1964)。

第一期には日本での移民の送り出しに関して政府による直接的な管理がなく、多くの移住業者が自由に営業をしていた。この時期の移民の

出身地は、主に沖縄、福岡、熊本、広島、鹿児島、そして福島である。これらの地方では、以前からアメリカ合衆国本土とハワイ諸島へ数多くの移民を出しており、1908年の移民に関する日米紳士協定により、移民の流れが大きくブラジルへ向かったことがうかがえる。

第二期と戦後の移民は政府の直接管理の下で行われたが、移民の出身地には大きな変化はなく、依然として西日本と九州・沖縄出身者が多い。移民総数でみると、第一期の移民総数は約3万5千人、第二期は約15万人、そして第三期は、1960年代初めまでの合計で約4万5千人であった。うち、戦前にブラジルへ移民した日本人移民は総数の約四分の三にあたる。現在、ブラジルにおける日系人人口は123万人と推定されている（サンパウロ人文科学研究所、1988）。

### 3 ブラジルで形成された「日本人」としてのアイデンティティ

最初の日本人移民がブラジルへ渡航して100年を経た今日に至るまでの間、日本人移民や日系ブラジル人の自己認識および帰属意識＝アイデンティティは様々な変遷を遂げてきた。

日系ブラジル人の多くは、自分はブラジル国籍を持ち、ポルトガル語を話し、ブラジルの文化・習慣に溶け込んでいるという意識を持っている。しかし、他方、彼らは日本人の血を引き、「日本」という象徴を背負っていることも同様にはっきりと意識していると言える。

前山隆によれば、日本人移民はブラジルでの

生活により、「日本人になった」のである（前山、1982）。彼らが主にブラジルの耕地でコーヒー栽培に従事していたとき、耕地内は多人種的状况にあった。つまり他の諸国出身の移民（イタリア人、ドイツ人、スペイン人など）や、ブラジルの黒人が労働者として混住していた。そこで、日本人移民は「日本人」と呼ばれ、日本人として扱われ、彼ら自身も次第に「日本人」になっていった。しかし、その「日本人」の意味は、ブラジル社会との関係をめぐる彼ら自身の認識の変化とともに少しずつ変化してきた。最初ブラジルへ移民した日本人から現在のブラジルの日系人に至るまで、「日本人」から「ブラジル人」への変化を経験してきたということになる。前山は、そのプロセスを、第一次出稼ぎ戦略、第二次出稼ぎ戦略、そして永住戦略の三つに区分している。

「第一次出稼ぎ戦略」とは、短期的な出稼ぎによる金銭獲得を目的とした戦略であり、今世紀初頭のブラジル日本人移民がこれにあたる。ブラジルへの移民が始まった20世紀初頭の日本では経済が悪化し、特に農民・労働者などに深刻な影響を与えていた。その中で、数年ないし10年程度でブラジルにおいて蓄財した後、日本へ戻るつもりで多くの日本人がブラジルへ移民したのであった。この時期はまた、日米紳士協定によりアメリカ合衆国本土とハワイへの渡航が事実上禁止された時期と重なっていた。

渡航先のブラジルでは当初の目論見通りにはいかなかった。主な理由として、第一に、ブラジルでのコーヒーの過剰生産と価格暴落があり、それにより移民の労働の条件は悪く、利益どころか、彼らの生活の維持にも苦しい状況であった。そこで、日本への帰国を果たせぬままブラジルに居残る移民が増大した。他方、ブラジルにおけるコーヒーの大プランテーション制が崩れ、移民は分譲に向けられた小規模の農地を購入し、または借りることが可能になったこともあって、移住は短期的計画から長期的な計画に変わっていった。

「第二次出稼ぎ戦略」への変化は、ブラジルにおける日本人移民の出稼ぎ目的が長期化したことを意味している。ここで子どもの教育問題に直面することになった移民の多くは、ブラジルで生まれ、ブラジルの文化の中で育つ子どもたちを、いずれ日本につれて帰るつもりであったため、家庭内では「日本人」として教育していたのであった。

「第二次出稼ぎ戦略」を経てやがて「第三の永住戦略」へと変化していく際に大きな影響を与えたのは、自作地の獲得が容易になったことに加え、1930～40年代の日本とブラジルをとりまく内外の状況の変化があった。すなわち、日本がアジアでの戦争に乗り出した一方、ブラジルではバルガス政権の樹立によって、強力な国民統合政策が実施され、外国語教育や外国語による報道などが禁止されたの

である。

これらの三つの段階を経て日本人移民がブラジルでの定住に向かったという前山のモデルは、ブラジルにおける日本人移民の意識の変化と日系人社会の形成過程を説明している。また、1970年代はじめまで日本からブラジルへの移民がつづいていたため、ブラジルの日系人社会における移民一世の影響が現在でもなお強く残っているという事実がある。そのため、日系人社会の多数を占めていて、日本を直接知らない二世・三世にとっての「日本」には、長年を経てブラジルで創られた一つのイメージである「日本」と、移民一世が語る「日本」とが錯綜している。いずれにせよ、現在の日系人の自己認識における「ブラジル人」と「日本人」の関係は、しばしば、ブラジル人でありながら「日本人」の子孫であると表現することが出来るものなのである。

しかし、日本へ来て、日本社会で生活し、「普通」の日本人と出会うことにより、ブラジルで持っていた「日本」のイメージ、そして「日本人」というシンボルは、ある意味で崩れてしまう。来日時までは、「日本人」というシンボルを、誇りとともにもっていた。しかしそれは、日本では何の意味も持たず、日本人からはただの外国人として扱われる。その結果、ブラジルに住んでいたときより「ブラジル人」という意識が強化される。つまり、前山が指摘するように、日本人がブラジルで「日本人」になったと同様

に、日系人は日本で「ブラジル人」という意識を再確認させられたのである。

このような状況のなか、ブラジル人は日本で生活を続けている。前山の定義を援用すると、日本における日系ブラジル人は第二ストラテジーに進んでいるといえる。つまり、日本において、家族の呼び寄せや帰国の困難により当初の短期滞在の計画に反して日本滞在が長期化し、様々な地域で暮らしているのである。

#### 4 ブラジルにおける日系人社会

現在、ブラジルで二世以降の世代が教えられる「日本」とは、一世の記憶にある「日本」と、ブラジルにおいて日系人社会の形成とともに創りあげられた「日本」であることが多い。しかし、なぜ日系二世・三世はブラジルに同化をしていると同時に一世から受け継いだ「日本」を維持しているのだろうか。

一つの説明としては、「日本」及び「日系人」は「美德」という側面だけで創り上げられており、そのイメージに日系人は自己を同一化（アイデンティファイ）することで、ブラジル社会で生き延びるための庇護を得、そして社会進出のための武器として積極的に利用しているといえることが考えられる。

日本人移民が創りあげ、日系人が受け継いだ「日本」というイメージは、ブラジルにおいて好意的なイメージだといえる。例えば、ブラジルにおける日本移民 80 周年記念の機会に出さ

れたバネスパ銀行（Banespa）の広告の「我が銀行には7千人以上の日系人スタッフがいます。

我々は彼らの親切さ、勤勉さに影響されてしまったので、我が銀行では日系人のスタッフしかいないと思われてしまう」という表現は、日系人のプラスイメージを表しているといえよう（パウリスタ新聞、1988）。なお、2007年12月に、ブラジルで調査中に、筆者が見たコマーシャルでは、日本移民 100 周年を記念して、ヘアル銀行（Banco Real）も、「わが銀行は多くの日系人スタッフに支えられている」と強調した内容をテレビで宣伝をしていた。

今日では日系人はブラジルの社会・文化の一員として、多くの面で好意的に認められている。例えば、教育面では、日系人は頭がよく、大学への進学率も高いといわれ、農業分野では技術を持ち、よく働く、そして一般的に「まじめ」、「正直」というイメージがある。このイメージを守るため、日系人は親から子へとブラジルにおける「日本」または「日本人」という象徴を伝えてきたのである。学歴に関しては、例えば、1980年のサンパウロ州の主要な大学の入学試験合格者の中で日系人の比率は一割であった。当時、サンパウロ州総人口に占める日系人の比率は2.5%足らずと推定されており、他州出身の日系人の受験者を差し引いてもこの日系人合格者の比率は高いといえる（Saito, 1980）。現在においても、ブラジル南部の多くの大学で、日系人は依然として1割程度を占める。たとえば、

州立ロンドリーナ大学の調査によると、2006年大学入学者の7%が、本人の「色」（人種）に関する問いに「黄色」と答えている（Universidade Estadual de Londrina, 2006）。ブラジルでは、「黄色」といった場合、アジア系移民の子孫を指すことが多い。また、同大学が発表した入学者リストから日本人の苗字のみを抽出し数えたところ、やはり1割程度であった。なお、サンパウロ大学の入学者リストでも、日本人の苗字を持っている合格者が1割程度であった。

しかし、日系人は日本へ来て、現実の日本と日本人に出会い、しばしば自分たちが想像してきた「日本」とは異なることを認識するようになる。そのとき、自分たちが創り上げてきた「日本人」というアイデンティティに衝撃を受け、批判的になる者がいる。

しかしこのように、日系人の中での「日本」・「日本人」イメージが変容するにもかかわらず、ブラジルにおける日系エスニック集団は存続する。それは、日系人が創り上げた「日本」・「日本人」像は必ずしも現実の日本ではなく、ブラジルの社会の中で生活する上での象徴であるからである。

日本人移民がブラジルで「日本人」というアイデンティティを持つようになったとき、彼らの日本人観は「日本的美德」のみに着目して創り上げられ、その「美德」の有無こそが自分たちと非日系ブラジル人（「ガイジン」）との決定的差異であると認識した。この論理から、「勤

勉でない者」、「犯罪者」等の負のイメージは、日本人ではなく、むしろ「ガイジン」すなわちブラジル人の資質とされたのである。彼らが自分たちの子どもに伝えようとした「日本人」のイメージは、このように「ブラジル社会の中で日本人・日系人」を意識したときに創り上げられたステレオタイプと多くの部分が重なる。

現在でも、日系人が多い地域には、必ずといってよいほど日系人団体が存在している。日系人一世をはじめ、二世・三世の多くはそれぞれの日系人団体との関わりを持ち、日系人団体での活動が生活の一部に組み込まれている。現在でも多くの日系二世・三世にとっては、私的な交際の範囲においても日系人同士の比重が大きい。

また、同時に「日本人」・「日系人」という集団への連帯感と責任感が強く表れる場合がある。ブラジルの日系人はブラジル国籍者であれば、自分が普通の意味でブラジル人であるということと否定しない。自分たちはブラジル生まれで、ポルトガル語を母国語とするブラジル人にはちがいないが、同時に「日系人」である意識を何の矛盾もなく持っており、時には、その「日系人」という付加された特徴（日系ブラジル人）ゆえに、「日系でないブラジル人」に対して優越感を覚える場合すらある。

##### 5 「日本人」、「日系人」、「ブラジル人」、「ガイジン」の違い

日系ブラジル人が抱く「日本人」という意識

は、日本においてもブラジルにおいても、ブラスの面のみを強調するステレオタイプ化された好意的なイメージに支えられている。日系ブラジル人は、ブラジルにいて自分たちを指すときに、「日系人」と「日本人」両方の言葉を使っている。前山によると、日本人移民はブラジルで人間、事物、事象を分類する際に、「日本」と「ブラジル」との対照によって意味を与えていた(前山, 1982)。例えば、「日本語」に対し「ブラジル語」(ポルトガル語)、「日本人」に対し「ブラジル人」・「ガイジン」、「日本料理」に対し「ブラジル料理」と呼んでいたのである。こうして移民は、「ブラジル」の対概念として「日本人」のアイデンティティをつくりあげた。現在でも、ブラジルでは日系人の間でこのような対概念にもとづく言葉使いが残っている。筆者の場合でいえば、子どもの頃ブラジルで「ガイジン」という日本語の言葉は、非日系人の意味として覚えた。つまり、「ガイジン」という言葉の本来の意味(外国人という意味)を知らずに使っていた。

ここで興味深いのは、日系ブラジル人はしばしばブラジル社会において「自分たち」以外の人々のことを「ガイジン」や「ブラジル人」の名で呼んでいるにもかかわらず、日本においては自分たちのことを指すのに「日系人」の他に「ブラジル人」を使っていることである。つまり、ブラジルにおいて日系ブラジル人は「ブラジル人」の対概念として「日本人」という意識

を持っていたが、それと同様に、日本では、日系人自身が「日本人」の対概念として「ブラジル人」という意識を持つようになっているのである。このとき、「日本人」という呼称は、日本に滞在する日系人の間では、自分たちとは違う「日本人」、すなわち、「日本の日本人」だけを指す。そして、ブラジルにおいて「ガイジン」や「ブラジル人」のものとしてきたネガティブな資質を「日本人」にあずけ、「日系人」にはブラジル同様、ポジティブな資質しか与えていない。

したがって、日本において日系人は自分自身を指すときに日本人に対し「ブラジル人」と「日系人」の言葉を同じ意味で使っている。日系人は非日系人に対しては「日本人」であり、日本人に対しては「ブラジル人」であったりする。

## 6 来日する日系ブラジル人の現状

1990年以降、来日するブラジル人は大幅に増加し始めて、現在では31万人を超え、そのほとんどが日系人である(入管協会, 2007)。ここでいう日系人とは、日本国籍を持たない日本移民の子孫を指す。現在来日している日系人のほとんどが日系二世・三世であり、彼/彼女らは日本での生活において、日本語をはじめ日本の習慣にとまどいを感じる人が多い。このように日系二世・三世の来日が可能になったのは、日本において1990年6月に「出入国管理及び難民認定法の一部を改正する法律」が施行され、日系

二世には「日本人の配偶者等」、そして日系三世には「定住者」の滞在資格が与えられるようになったからである。

来日する日系人は、二種類に分類することができる。第一のグループは、ブラジルにおいて日系人社会に参加し、自分たちは「日本人」としての素質をもつ「日系ブラジル人」とであるというエスニック・アイデンティティを持っており、日本社会に親近感を持っている人々である。このグループの人々は、ブラジルにおいて、親や祖父母から受け継いだ伝統的な誇りや名誉に関わる価値を評価し、「日本人」であることをプラスイメージとして認識しており、来日はある意味では祖先の国へ「帰国」することであるという考えを持っている。二つ目のグループは、主に経済的な動機で来日する人々で、日系二世・三世が多い。

しかしながらこのような違いにもかかわらず、来日後は両グループともに、日本人としては認められず、外国人労働者に過ぎないことに気づくようになる。それにより、日系ブラジル人は、日本に来てから「ブラジル人」という意識がより強くなる傾向がある。

彼／彼女らは当初2,3年の短期間日本に滞在し、中・小零細企業で非熟練労働者として働いた後、帰国する予定だった。しかし、当初の目論見とは違って、現在は日本滞在年数が長期化しており、例えば、2006年浜松市が実施した調査では、日本滞在期間が6年以上が58%、その

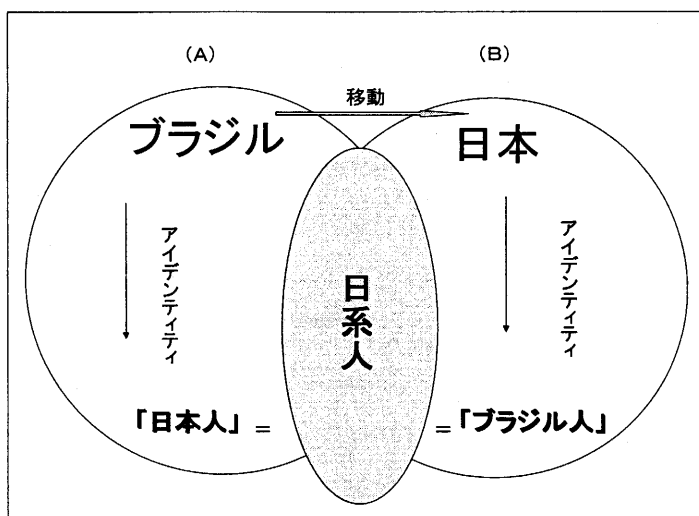
内15年以上が12%だった。なお、在留資格に関しては、38%が既に「永住ビザ」を取得していた（浜松企画部国際課、2007）。つまり、日系人は実質的には「短期滞在外国人労働者」から「長期滞在外国人住民」へと生活実態が変化してきたのである。

## 7 結語——日系ブラジル人のアイデンティティのモデル

ブラジルにおける日系人は「日本人」だというアイデンティティを持っている。ここでは、「日本」・「日本人」とは「真面目」・「勤勉」など好意的な意味をもつ。しかし、ブラジルで生まれ育った日系人（二世以降）にとって、「日本」・「日本人」とは一つのシンボルに過ぎない。つまり、「真面目」・「勤勉」な日本人とはブラジル社会における生活で優越的な意味を持ち、日系ブラジル人がアイデンティファイするシンボルである。

ところで、日系ブラジル人は来日することにより、自分たちが教えられた「日本」・「日本人」は少なくとも現実の日本と日本人とは切り離されて存在するということを認識する。ただ、ブラジルにおいても、日本においても、「日系人」というアイデンティティは共通するのである（図1参照）。

図1. 日系ブラジル人のアイデンティティの変容モデル



筆者作成（イシカワ、2008）

(A) 日系人がブラジルにいる時：プラスなイメージを持った「日本人」にアイデンティファイする。同時に「ブラジル人」に対してはマイナスなイメージを持つ。

(B) 日系人が日本にいる時：プラスなイメージを持った「ブラジル人」にアイデンティファイする。同時に「日本人」に対してマイナスなイメージを持つ。

日系ブラジル人は、新しい環境での生活においてプラスなイメージを持つ標識を選びとろうとする。また、日系ブラジル人の日本滞在の長期化がすすむにつれて、彼らのアイデンティティが「日本人」と「ブラジル人」という両極端にある概念とは違ったかたちのアイデンティテ

ィを持つようになるのではないだろうか。

日系ブラジル人の場合は、ブラジルと日本という場所の移動や、時間により様々な変化を遂げてきたにもかかわらず、その存在を支える「日系人」としてのアイデンティティは根強く保持されている。それは、一体感情、つまり「日本人の子孫」＝「日本的美德としてのステレオタイプ」という感情を共有している人々から構成されているからである。

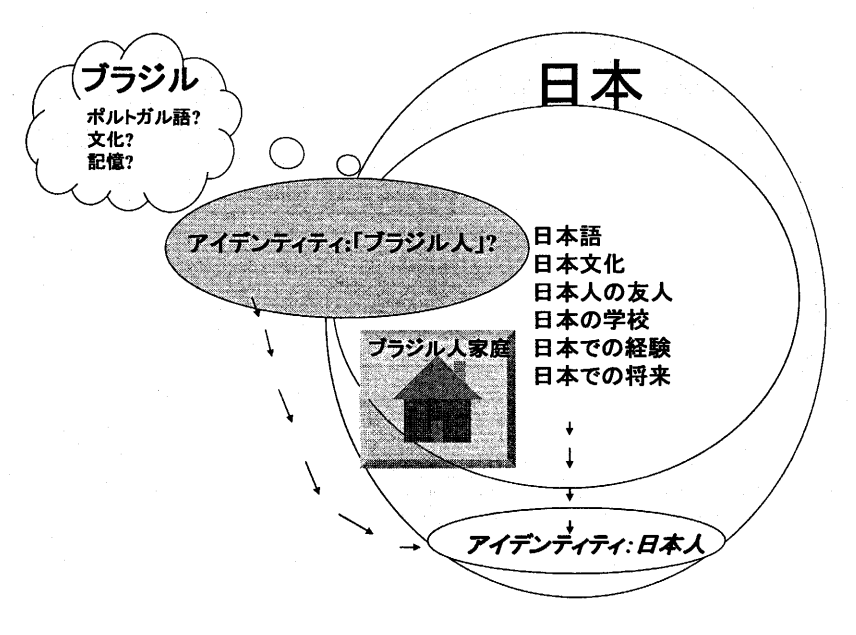
日本での長期的滞在により、日系ブラジル人のアイデンティティに見られた変容は、来日当初の「日系人」としてのアイデンティティの意味の変化である。つまり、来日当初は「日系人」とはブラジルで教えられた美德化された「日本人」であったが、日本へ来ることにより、「日本



人を対概念にしてブラジルから来る日系人と非日系人を一まとめにする「ブラジル人」というアイデンティティが強調されるようになった（「日系人」＝「ブラジル人」）。以上のことから、日系ブラジル人は日本でよりよい生活をするためには、日本人のよいところとブラジル人のよいところを持つ「日系人」であるという意識を持つようになったことが分かる。

一方、日本で育つ子どもたちはどうだろうか。親の場合、来日により「日本人」から「ブラジル人」へとアイデンティティが変化する。しかし、子どもの場合、このような論理にはあてはまらない。子どもたちの中にはブラジルを直接知らない、もしくは覚えていないというケースが多いからである。

図 2. 日系ブラジル人の子どものアイデンティティ・モデル



筆者作成（イシカワ、2008）

このモデルでは、子どもたちが日本で生活する環境により、日本社会へ適応していく過程を描いている。多くのブラジル人の子どもは日常的に日本語を使い、日本の学校に通いながら日本人の子どもと変わらない経験をしていく可能性

がうかがえる。他方、日本生まれの子どもが増加している今日、ブラジルというのは親に教えられる「ブラジルの記憶」であり、現実的な記憶ではない。そのため、子どもたちは日本社会への適応過程において、今度は日本人としての

アイデンティティが芽生えてくると考えられる。

\*本稿は、イシカワ（2003a、2003b、2004）を基にして修正・

加筆して執筆した。

## 参考文献

- イシカワ・エウニセ・アケミ、2003a、「ブラジル人の日本滞在長期化にともなう諸問題」『ラテンアメリカ・カリブ研究』第10号、11～20頁。
- 、2003b、「ブラジル移民の現状と移民政策の形成過程——多様な海外コミュニティとその支援への取り組み」駒井洋（監督）小井土彰宏（編）『移民政策の国際比較』グローバル化する日本と移民問題 第一期第三巻、明石書店、245～282頁。
- 、2004、「ブラジルと日本における「日系人」の文化的変容 ——「日本人」・「日系人」・「ブラジル人」・「ガイジン」の違い」鹿児島国際大学国際文化学部論集、35～52頁。
- 、2008、「Identidade Étnica dos Nikkeis Brasileiros no Japão- O ambiente em que vivem as crianças brasileiras em Hamamatsu —（「在日系ブラジル人のエスニック・アイデンティティ——浜松における日系人子弟の生活環境」）（研究代表、池上重弘）『外国人市民と地域社会への参加——2006年浜松市外国人調査の詳細分析』平成19年度静岡文化芸術大学文化政策学部長特別研究、成果報告書、90～102頁。
- Universidade Estadual de Londrina、2006、PERFIL DO ALUNO INGRESSANTE, Pró-Reitoria de Planejamento, Diretoria de Avaliação e Acompanhamento Institucional, Publicação eletrônica ([http://www2.uel.br/cpa/arquivos/Perfil\\_Aluno\\_2006.pdf](http://www2.uel.br/cpa/arquivos/Perfil_Aluno_2006.pdf)).
- Saito, Hiroshi, A Presença Japonesa no Brasil, Editora da Univ. de São Paulo, 1980.
- サンパウロ人文科学研究所（編）、1988、『ブラジルに於ける日系人口調査報告書——1987・1988』。
- 鈴木梯一、1964、『ブラジルの移民史』（ブラジル日系人実態調査委員会）東京大学出版会。
- 日本人発展史刊行会、1953、『ブラジルにおける日本人発展史』下巻、昭和28年。
- 入管協会、2007、『在留外国人統計』平成19年版。
- 前山隆、1982、『移民の日本回帰運動』日本放送出版協会。
- パウリスタ新聞、1988年6月22日。
- 浜松市企画部国際課、2007、『浜松市における南米系外国人の生活・就労実態調査』報告書。

（いしかわ えうにせ あけみ・静岡文化芸術大学）